

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月28日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



1月24日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」と、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。兵庫県選出の匠、江藤雄造さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

本プロジェクトは2016年プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト・アーティスト・プロデューサー）、下川一哉氏（匠研究所）らをサポートメンバーに発注。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロジェクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かして、新しいモノづくりへの挑む「匠」を応援する。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りにサポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて



プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と世界的クリエイター（コラボレーター）が新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SUMARUKAクリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANRALAGE代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター）、プロダクトデザイナー（が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化した。

文化財の修復で腕を磨く

お腕や重箱などに品のあるつやを加える漆（うるし）工芸。そうした漆器の最終工程で漆と金粉や銀粉などを使って花鳥風月などの装飾をほどこすのが時絵（まきえ）だ。江藤雄造さんは、漆芸家である時絵師の父・江藤國雄さんが、自宅の工房で一心不乱に時絵筆や粉筒で時絵を仕上げている姿を幼いころから目の当たりにしてきた。もともと絵を描くのが好きで、高校時代には多くのコンクールに出展し、賞をさらった。



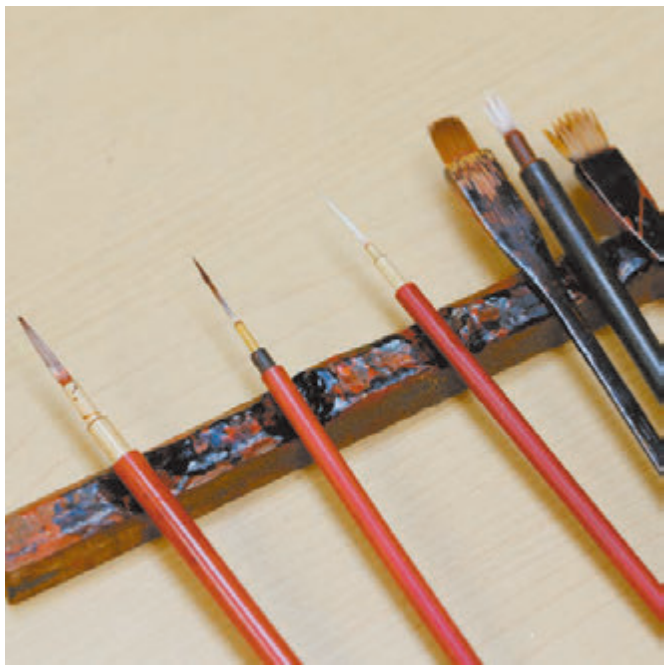
エリア・コンサルティングの様子

「集団の中にいるのは苦手」と高校卒業後は就職を考えたことなく、國雄さんのもとで修業を積む道を選んだ。お椀の漆塗り、陶磁器の金継ぎ、仏壇修復時の漆塗り・時絵など当初はもっぱら國雄さんが手掛ける仕事の下作業を任せられ、腕を磨いていった。基本的には見よう見まね。父も最低限のことしか言いませんでしたし、自分で考えながら覚えていきました」

漆の魅力をより多くの人に

芸術品ともいえる漆器だが高価なこともあり、かつてほど使われることはなくなった。それにつれて職人の数も減少しつつある。技術に裏打ちされた日本の伝統文化の価値をもう一度より多くの人に知ってもらうためにはどうしたらよいかを考えていた江藤さんのたどり着いた結論の一つが「アートとして表現すること」だったという。「作品を通じてより多くの人に漆芸、時絵の魅力をまず知ってもらうことが大切。そこから日常生活にも取り入れてもらうところへつながってほしい」と話す。

その思いを体現すべく2年前、姫路市内の美術館で個展を開き、野心的な作品を発表した。テーマは「金魚」。4畳分の大きさのアクリル板全面に漆塗りを施し、何匹もの金魚を描いた。その上に、金魚を描いた透明のアクリル板を重ね、さらに同じように金魚を描いたアクリル板



工房の風景(道具)

アクリル板を使い、和を立体的に表現 アートとしての時絵、世界に発信

江藤雄造 兵庫/漆芸家

をその上に重ね、3層構造にした。こうすることで、たくさん金魚が池の中を泳いでいるように見せ、上から光を当てることでアクリル板の漆に金魚の影が映り、立体的に浮かび上がる。「長い目で考えた時に、まず子ども時から漆に触れる経験を持つてもらおうと考えました。そして子どもたちが興味を持つものは何だろうと考えた時金魚だったのです」と発想の経緯を説明する。思惑通り、床に敷いて子どもたちが遊ぶスペースとして提供したところ、好評を博した。



江藤さんの作業風景



江藤さんの作業風景

金箔を背景にきりぎりびやかた演出

今回、プロジェクトで制作した作品「夢見華蝶図」もその延長線上にある。横60センチ縦45センチのアクリル板に描いたのは、姫路市の市蝶であるジャコウアゲハとたつの市の市花である桜。アクリル板の下には竹炭で染めた越前和紙を置くことで、蝶と桜の影の存在感を強調した。また作品の周囲には、國雄さんが復元した姫路の書写塗の朱塗り（しゆり）をほどこし、作品を引き立たせた。「金魚が子どもたち向け

ならこの作品は海外の人向け。日本らしさを採り入れました」当初は、上に食器を置く食事台などの日用品使いとアートの双方での利用を想定していたが、キックオフ・セッションの時に小山氏、サポートメンバーの川又俊明氏から「思い切ってアートに振った方がいい」とのアドバイスを受け、変更。アートとしてどのように作品を仕上げるか考えていたところ、エリア・コンサルティングで工房を訪れた川又氏が試作を見て「背

景は和紙だけでなく金箔も作り、絢爛な和のイメージを強調してみたい」とアドバイス。それをききかけに、金箔和紙の作品を制作。和紙版の様に使っていた銀粉を金箔版ではプラチナ粉に変え、表現をきらびやかにした。背景に金箔を用いるのは自分では思いも付かなかった。今回の挑戦で何度も試作と失敗を重ねたが、そのことで素材や材料を見直す良ききっかけとなり、自分の仕事に対する引き出しが増えた。この経験を活かして、今後も新しい漆の世界を提案していきたいと江藤さんは話す。

Urushi Makeieを世界に

今回のプロジェクトが縁となつてこの4月にイタリアのミラノで開かれる世界最大規模の家具見本市「ミラノサローネ」の家具見本市へ作品を出展することが決まった。いつかは世界へと思っていたが、そのチャンスが早くめぐってきました。喜ぶ。そのためにも今後は伝統工芸作品としての細かな技術も修得して考えてきた。「Urushi Makeieを世界に」の思いは今ますます強まっています。



江藤雄造 兵庫/漆芸家

1982年兵庫県姫路市生まれ。学生の頃から家業を手伝い、重要文化財の修復・個展などを行いながら2013年香川漆芸研究所研究院を卒業。2014年日本伝統工芸近畿展「新人奨励賞」、兵庫工芸展「大賞」など受賞。各地で金継ぎ・漆教室の講師を務める。2018年「江藤漆美術工芸」『Urushi Amuse』設立。

